「十雪詩」のゆくえ

中本　大

はじめに

月舟寿桂（一四七〇～一五三三）の別集『幻雲藁』巻第二に「東坡邇英閣講論語図（東坡邇英閣にて論語を講ずるの図）」という詩題の七言絶句が収められている。[1]

香孩曽定宋乾坤　香孩曽つて定む宋の乾坤
功在韓王半部論　功は韓王半部論に在り
好召坡翁紹先業　好んで坡翁を召して先業を紹ぐ
学而時習聖雲孫　学びて時に習ふ聖雲孫

『幻雲藁』は編年配列であることから、この題画詩が作られたのは月舟が師事した天隠龍沢没後の明応九年（一五〇〇）晩秋から初冬であることが知られる。その詩題は、蘇軾が禁苑宮殿の邇英閣で太子に論語を講じ終えた後の宴（竟宴）で詠じたという七言古詩「九月十五日、邇英講論語、終篇、賜執政講読史官燕於東宮、又遣中使、就賜御書詩各一首。臣軾得紫薇花絶句。其詞云、絲綸閣下文書静、鐘鼓楼中刻漏長、独坐黄昏誰是伴、紫薇花對紫微郎。翌日、各以表謝、又進詩一篇、臣軾詩云」を踏まえたものである。同画題の本邦での現存作例は報告されておらず、詩題として設定された架空の画題であった可能性も考えられる。五山の詩会ではそうした詩題を用いる事例も少なくなかったのである。[2]

月舟詩の制作契機も勿論興味深いものの、ここではその第二句の典拠に注目したい。ここで踏まえられているのは所謂「半部論語」の故事である。すなわち、太祖を輔佐して趙宋建国に尽力した韓王趙普が終生『論語』を尊び、『論語』の半分をもって太祖を輔佐して天下を取り、別の半分でもって太宗を輔佐して天下を治めることができた旨を太宗に語った、という逸話で、本邦禅林でも受容された『鶴林玉露』乙編巻一などに採録されるものである。[3]中国宋代の『論語』侍講という主題で、月舟の詩嚢から抽出されたのが趙普の故事なのであった。

北宋建国をめぐる背景の詳細は『宋史』や『資治通鑑』・『宋朝事実類苑』などに記されており、博識な学僧であればそれらにも通暁していたであろう。しかし、本邦禅林においては太祖を輔佐して趙宋建国に尽力した名宰相、趙普の知名度を圧倒的に高める契機が存在していた。中国元代の総集『皇元風雅』に収められた「十雪題詠」の冒頭「韓王堂雪」詩がそれである。

「十雪題詠」とは中国漢代から宋代に至る「雪」に関する十人の故事を撰び、それを『蒙求』に類似する四字熟語で詩題に掲げた七言律詩十一首連作で、その詩題の一覧は、「韓王堂雪・伊川門雪・袁安臥雪・李愬淮雪・王猷溪雪・李及郊雪・蘇武羝雪・鄭綮驢雪・孫康書雪・欧陽詩雪」である。冒頭の「韓王堂雪」詩のみ二首が掲載されているのは、帝国創業者への尊崇とも考えられる。

既に拙稿で述べたように、本邦禅林でも室町時代初期に文壇を牽引した惟肖得巌の追和詩をはじめ、西胤俊承・南江宗沅・瑞渓周鳳等に「十雪」詩の作例があり、更に『花上集』などの総集や『国花集』などの類書に採録されたことで後代の禅僧も親炙し、著名な詩題になったと考えられる。[4]

「十雪題詠」は本邦で画題としても転用され、北野良枝氏の考察に拠ると、数は少ないものの狩野元信筆妙心寺霊雲院旧方丈障壁画をはじめボストン美術館所蔵狩野山雪筆「十雪図」屏風など、幾つかの作例を見出すことが出来るとされる。[5] 北野氏が指摘される以外にも、アルカンシェール美術財団所蔵初期狩野派「韓王堂雪」図襖絵も「十雪題詠」に由来する画題として認定してよいであろう。また洛北曼殊院で慈恵大師像が安置される「十雪の間」が、狩野探幽筆の障壁画題に由来することも知られている。

さて、画題としての展開を考える際、『続史愚抄』宝暦十三年（一七六三）七月二十五日条に記された次の記事は大変興味深い。[6]

廿五日庚辰。自今日三箇日被行不動小法於常御殿。十雪絵間也。元為琴碁書画絵。依為桃園院崩御間。被造改此一間者。

桃園天皇登遐の後、不動小法が行われる常御殿の一間が天皇崩御の間であったため、障壁画を「琴碁書画」図から「十雪」図に変更したことが書き記されているのである。本稿では近世中期、「十雪」が夥しい作例の残る琴棋書画図に替わる画題として、禁裏の荘厳に用いられていたという事例を端緒に、本邦禅林で受容された一詩題が禅林詩壇衰退後、近世に至ってどのような展開を遂げたのか、概観したいと考えている。

一

室町時代禅林における「十雪題詠」の受容について、前稿を補足しつつ概観しておこう。拙稿で詳しく考察した惟肖や西胤等の追和詩以外にも、以下のような受容例を見出すことができる。

桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）が門下の詩僧に与えた課題に

「十雪」が含まれていたことは、朝倉尚氏が紹介された妙心寺雑華院蔵『古宿会詩』の存在によって明らかにされた[7]。室町時代中期、禅林学僧が学ぶべき作詩の規範として「十雪題詠」が利用されていたことは興味深いものの、初学者のみならず、更にその受容例が瑞渓に列なる相国寺の学僧で、詩・聯句の領袖として桃源とともに詩壇を牽引した横川景三（一四二九～一四九三）と、南江と同じ建仁寺の月舟（既掲）の詩作に見出せることは、両者の室町時代後期禅林文壇への影響力の大きさを考える上で注目されるであろう。横川の作例は「雪夜与客論詩（雪夜客と詩を論ず）」という次の七絶である[8]。

十雪古聞今見之　十雪古へに聞き今之れを見る
掃門迎客倒伽梨　門を掃き客を迎へんと伽梨を倒す
夜深月落品題定　夜深く月落ち品題定む
中有梅花寒似詩　中に梅花有り　寒きこと詩の似し

雪の夜、故人とともに景色を眺めつつ詩を吟じれば、「十雪題詠」にも劣らない風雅の世界に誘われるであろうと思いながら、客を迎えるため門を掃き清め僧衣を着替える。夜も更けて月も西に傾くなか詩を品評するうちに、何処ともなく梅の香が漂い、詩興も研ぎ澄まされていく、という情景を詠じたものである。詩題注に「希世来訪、会者十人、聯句五十韻、句罷、評詩」とあり、敬愛する詩壇の長老、希世霊彦（一四〇四～一四八九）を迎え、気の置けない十人の仲間同士で聯句を楽しんだ後、互いに漢詩作品を品評し合う自由な団居での詠作であったことが知られるのである。雪夜の吟詠という契機で、「会者十人」であったことが、横川をして「十雪」への連想に導いた所以であろう。

横川詩に続いて掲載された希世の作品は、

又　希世作

灞上吟驢久駐鞍　灞上の吟驢久しく鞍を駐め
玉堂白戦亦応難　玉堂の白戦亦た難に応ず
論詩未了天猶雪　詩を論ずること未だ了らざるに天猶ほ雪ふり
人与梅花一夜寒　人と梅花と一夜寒し

という措辞である。横川詩の「十雪」を踏まえ、希世は第一・二句で各々「十雪題詠」の「鄭綮驢雪」詩と「欧陽詩雪」詩の故事に言及している。やはり「会者十人」による「論詩」の対象が「十雪」であったことが確認できるであろう。横川と希世の応酬は、五山詩壇で「十雪」が広く人口に膾炙していたことの証左と見做し得るのである。

次に掲げる月舟の作例は更に重要である。

焚香聞雪　香を焚きて雪を聞く
密々疏々灑竹時　密々疏々竹に灑ぐ時

鷓斑焚尽撚吟髭　鷓斑焚尽きて吟髭を撚ねる
元人十雪無香字　元人の十雪に香の字無し
一瓣今宵補逸詩　一瓣　今宵　逸詩を補はん

一詩の措辞は中国南宋を代表する禅僧、虚堂智愚の偈「聴雪」に発想を得たものである。虚堂詩の全文は「寒夜無風竹有聲、疎疎密密透疎櫺、耳聞不似心聞好、歇却燈前半卷經（寒夜風無く竹に声有り、疎疎密密松櫺を透る、耳聞は似かず心聞の好きに、歇却す灯前半巻の経）[9]」で、月舟は第一句でその情景を完全に再現するものの、第二句では虚堂が描かない名香「鷓斑（鷓鴣斑）」の名を挙げるのである。「嗣香」という禅語もあるように、禅林の頌偈において「香」は法嗣を象徴する最も重要な主題の一つである。一方、鷓鴣斑は黄庭堅の詩句によって禅林に広く知られた帳中香の材料とされるものでもあった。帳中香は中国江南の李後主が愛好したという名香でもある。月舟の発想も禅的境界に留まることなく、敢えて宋の太祖に滅ぼされた風流な国王、李煜が敬愛した文人的世界に及ぶのである。李後主は「十雪題詠」冒頭の「韓王堂雪」詩に登場する人物でもある。そこで月舟は「十雪」では薫香が詠じられていないことを指摘し、今宵自らが補おう、と高らかに謳うのである。惟肖以来の伝統を受け継ぎ、李後主を詠じた代表的な詩題として、五山僧が「韓王堂雪」詩を理解していたことが確認されるのである。

月舟には別の受容例もある。「夢雪（雪を夢にみる）」詩がそれである。

一枕清風暑気収　一枕の清風暑気収まり
忽驚六出満皇州　忽ち驚く六出　皇州に満つるかと
元人若識黒甜楽　元人若し黒甜の楽しみを識らば
十雪詩中添我不　十雪詩中に我を添ふるや不や

夢に雪景色を見た月舟。枕元を吹く一陣の風に暑気も収まり、夏の皇都に雪が降り積もったのかと驚いて目覚める。我に返った作者は、中国元代の詩人たちが昼寝の楽しみを知っていたならば、「十雪題詠」に袁安ではなく我が昼寝の様を詠じたかもしれない、と洒落てみせるのである。

月舟の次世代の建仁寺の学僧、驢雪鷹灞（生没年不明）にも「芭蕉題詩図」を詠じた次の七絶が残されている[10]。

芭蕉未破雨過晨　芭蕉未だ破れずして雨　晨を過ぎ
幾首題詩字々新　幾首か詩を題すれば字々新たなり
一葉若能書十雪　一葉　若し能く十雪を書せば
唐人画可属元人　唐人の画も元人に属すべし

詩題の「芭蕉題詩図」については既に拙稿で述べたことがあり[11]、詳細はそれに譲るものの、雪景色のなかに南国の芭蕉を描いたという唐代詩人、王維の逸話を取り上げ、「十雪題詠」の詩題に王

維が選ばれてもよいものを、と思いめぐらしているのが興味深い。この発想は後述する近世の「十雪」題新撰の試みに繋がるものでもある。

このように、雪を詠じた詩作といえば、すぐに「十雪題詠」と結びつけられるほどに禅僧――特に建仁寺の学僧――は「十雪」詩を悉知していたのであった。

二

五山僧の詩嚢に蓄えられた「十雪題詠」は、五山禅林の学統に列なる近世初期の儒者たちにも受け継がれ、愛唱されていた。幼少期に建仁寺で学んだ林羅山（一五八三～一六五七）の別集『羅山先生詩集』巻第三十「雪　下」には二首の「韓王堂雪」詩を見出すことができる。[12] 第一首目は詩題注に「丙辰十二月十一日正意席」とあり、元和二年（一六一六）十二月十一日、堀正意（杏庵・一五八五～一六四三）が主催する詩会での詠作であることが知られる。同じ席上では「孟子白雪」という一首も作られており、後に触れるように、既存の「十雪」詩題に飽き足らず、新たな詩題を創作する意欲も看取できて興味深いのである。なお、元和二年の作例としては、「李愬淮雪」詩が一首収められているものの、制作契機は不明である。

「韓王堂雪」詩の第二首目は詩題注に「甲午十二月二十二日」とあり、羅山晩年の承応三年（一六五四）の作であることが知られる。「十雪題詠」は羅山が生涯に亙って愛好した詩題だったのである。

桃源が門弟の教育に用いたように、羅山も子弟の庭訓のために「十雪題詠」を役立てていた。愛息・読耕斎守勝（一六二四～一六六一）に関する次の詩題は興味深い。

守勝頃除元人所題品十雪之外賦冊雪絶句、不日而成。既而今朝凍雨霏霏及晩積雪墻壁為堊塗屋瓦化白鴛。樹樹生花、石変監（「鹽」カ）虎。想夫遺蝗入地、宿麦連雲、呈瑞于豊年、不亦哿哉。吾為守勝賀冊雪之有応与一夜之得明。不可不愈勉益進也。於是又賀之云爾。（守勝頃ろ元人の題品する所の十雪を除くの外の冊雪絶句を賦さんとし、日あらずして成る。既にして今朝凍雨霏霏として、晩に及んで積雪、墻壁堊塗と為り、屋瓦白鴛と化す。樹樹花を生じ、石塩虎に変ず。想ふに夫れ遺蝗地に入り、宿麦雲に連なるがごとく、瑞を豊年に呈すること、亦た哿からざらんや。吾れ守勝が為に冊雪の応有ると一夜の明を得るとを賀す。愈よ勉め益す進まずんばあるべからず。是に於いて又た之を賀すと、爾云ふ。）

六花筆落季冬天　六花筆とともに落つ季冬の天
呵硯裁成四十篇　硯を呵して裁し成す四十篇
憶得坡仙知此趣　憶ひ得たり坡仙此の趣きを知るを
新詩曽禱霧猪泉　詩を新たにするは曽て霧猪泉に禱るがご

にして法なると故きを温ため新しきを知るとは、是れ我が待つこと有る所なり。因りて其の韻を次して以て之れに示す）。

慶安元年（一六四八）十二月二十九日、函三子（守勝）が袖中から『皇元風雅』所収詩題とは重複しない、新たに自撰した「十雪」題の絶句を羅山に示したことがあった。その意欲に感動した父・羅山は新奇かつ格調を失わない息子の作風を称揚し、次韻詩を呈したのであった。読耕斎守勝が新たに詠じた詩題は「武王洛雪・曾子泰雪・楚荘戸雪・季龍苑雪・謝荘衣雪・韋斌靴雪・蘇軾堂雪・希真洲雪・桓胤扇雪・耿生銀雪」の十首である。

一方の羅山も寛永十九年から慶安年間にかけて所謂「和漢十題雑詠」という様々な十題詩作成に勤しんでいる。慶安四年（一六五一）七月十六日には「十雪」を本朝の名所に取りなした一首として「大原山雪」を、同年九月二十日には「十詩集」の一詩題として「元朝風雅集」を詠じている。「十雪題詠」が長年に亙って林家の人々の詩興を刺激し続けたことが裏付けられるのである。

三

林羅山の「十雪題詠」愛好を検討したとき、那波活所（一五九五～一六四八）との相違点が浮かび上がるのは興味深い。北野良枝氏が指摘されるように別集『活所遺藁』巻第三には「十雪詩幷

とし

すなわち、読耕斎が「十雪題詠」とは重複しない題材で雪を賦した絶句四十首を完成させたところ、降り続いていた雨が雪に変わり、周囲が銀世界に変じた。それを守勝の詠作に感応した奇瑞と考えた父・羅山が愛息の益々の精進と学業の進展を祈念して、「鹽虎」や「霧猪泉」など李商隠や蘇軾などの措辞を引用しつつ製した作なのであった。詩注には「寛永十七年十二月」とあり、守勝十四歳の作であることが確認できる。

この四十首連作に続いて、その八年後の慶安元年（一六四八）十二月、読耕斎が行った新たな試みの経緯が次掲「和函三子十雪韻（函三子の十雪の韻に和す）」という次韻詩の詩序に記されている。

和函三子十雪韻

戊子季冬二十九日、函三子自袖出一幅。見之新撰十雪題為之絶句。皆元朝風雅集所不載者也。其奸（「好」カ）奇好新、可以観焉勉哉。蘇黄奇、有待之歟、然易奇而法与温故而知新、是我所有待也。因次其韻以示之（戊子季冬二十九日、函三子袖より一幅を出だす。之れを見れば新たに十雪の題を撰し之れが絶句を為すなり。皆な元朝風雅集に載せざる所の者なり。其の奇を好み新を好む、以て観ずべく勉めよや。蘇・黄の奇、之れを待つこと有らんか、然れども易へることの奇

序」という作品が採録されており、その制作時期は寛永四年（一六二七）正月以降寛永七年（一六三〇）十二月以前に絞られることが確認されている。[13] その序文冒頭で活所は、「十雪題詠権輿乎皇元風雅集、国朝浮屠惟肖亦摹貌而和。眩博之志可尚哉（十雪題詠の権輿は皇元風雅集なりて、国朝浮屠惟肖亦た摹貌して和す。眩博の志尚すべきか）」と述べ、本邦禅林において最初に「十雪題詠」に追和したと考えられる惟肖得巌の功績を称揚し、次いで十詩題の概略を書き記した上で、道家正休氏の主導で追和する喜びを述べるのである。「十雪題詠」の受容拠点としての五山禅林への言及は、羅山詩には見られない特徴である。

『活所遺藁』が掲載する『活所先生年譜』に拠れば、活所の藤原惺窩への附弟は慶長十七年（一六一二）十月のこととされる。その後の詳細な活動は不明ではあるものの、活所が序文で「韓王堂雪」詩が詠じられた元和二年十二月二十一日の堀杏庵主催の詩会について記していないのは、羅山や杏庵より一回り以上年少の活所が、その詩会には出席していなかったためであると考えられる。それは活所が惺窩に入門して僅か四年後の詩席だったのである。活所の序文は「今道家正休氏会諸友令賦之予亦得漱一雪然技療不可歇也故不揣暗昧倣著題体併詠十雪（今道家正休氏、会の諸友をして之れを賦さしむ。予亦た一雪を漱ぐことを得たり。然れど技療歇むべからざるなり。故に暗昧を揣かず、倣ひて題体を著し、併せて十雪を詠ず）」と締め括られており、一見して初学のころから長年親しんできた詩題を論じているとは解せないことから、活所の「十雪」詩との邂逅は、師匠の藤原惺窩や先輩である羅山や杏庵を介したものではなかったと考えるのが妥当なのではなかろうか。

一方、寛永年間以降に羅山の子弟が「十雪題詠」に親昵する背景の一つに、彼らと盛んに徴逐していた活所の存在を想定する必要は大いにある。その上で、北野氏が指摘するように、狩野山雪筆「十雪図」屏風の制作契機に活所との交流を想定するのは興味深いものの、活所以前に羅山や堀杏庵が詩会で「十雪題詠」を取り上げていたことや、羅山が子弟の教育にも積極的に用いていたと考えられることは更に重要なのである。

先に挙げた羅山の十首連作への敬慕を示した「和漢十題雑詠」は、その息子、鵞峰による序文が残されている。その内容は、さながら「十首連作詩題集成」といった趣きであるが、そのなかで中国における「十詠」の具体例として挙げられているのが、李白の姑熟十詠・杜甫の夔州十絶・韓愈の琴操十首・元稹の楚歌十首・皮日休と陸亀蒙の十漁具十茶具・王安石の華亭十詠・蘇軾の荊州十首・黄庭堅の黔南十首・陳師道の秋懐十首・元人の十雪十台であり、李杜蘇黄をはじめとする錚々たる顔ぶれに交じって元代の「十雪」と「十台」が言及されているのである。[14] 桃源瑞仙の例を挙げるまでもなく、作詩の訓練で多彩な故事を網羅する「十題」を課すことは、その詩嚢を肥やす上でも有益であった。その中でも「十雪題詠」は有用な古典として、本邦五山禅林を経て、羅山以降の林家の教育にも活用されていたのである。

四

読耕斎の事例に見られるように、原典の規矩に依拠しながら、「十雪」を新撰する試みは、新たな詩興の獲得に繋がる行為と考えられる。その試みは既に元和二年堀杏庵主催の詩席で詠じられた「孟子白雪」題に看取し得るものの、この詩題が予め用意されていたのか、或いは当座の詩題であったのかは不明である。羅山の別集では「韓王堂雪」詩より前に置かれているところから、兼題であった可能性が高いとは考えられるものの、確実な判断材料は見出せない。他方、読耕斎に類似した詩題新撰の試みが、木下順庵（一六二一～一六九九）と祇園南海（一六七六～一七五一）という師弟の別集に残されているのも、単なる偶然ではあるまい。

順庵の別集『錦里文集』巻五（「西京稿」）には、「十雪」という詩題を明記することなく、「韓王堂雪・伊川門雪・袁安臥雪・李愬淮雪・李及郊雪・蘇武羝雪・鄭綮驢雪」の七詩題が掲げられた後に「昌黎関雪」が置かれているのである。[15] この詩題は韓愈（昌黎）の「左遷至藍関示姪孫湘（左遷せられて藍関に至り姪孫の湘に示す）」詩の一聯「雲横秦嶺家何在、雪擁藍関馬不前（雲は秦嶺に横たわりて家何くにかある、雪は藍関を擁して馬前まず）」を踏まえたもので、雪深い関所を越え、左遷先の任地へ赴く情景を詠じたものである。順庵にも羅山と同様、通常の「十雪題詠」とともに、自ら新撰した詩題を披露する機会があったものと考えられる。

更にその試みを更に進めたと思われる例が、江戸の順庵門下で学んだ祇園南海の別集『南海先生文集』巻之三に見られるのである。[16]「十雪詩」と総称された十首連作の各詩題は、「穆王獵雪・景公賑雪・蘇武卌雪・袁安臥雪・東郭履雪・王恭裘雪・孫康書雪・謝女咏雪・子猷棹雪・鄭綮驢雪」である。『南海先生文集』は詩体別の配列で、巻之三は七言律詩である。「十雪詩」に続いて「哭筑州使君白石井先生五首」が収められているため、「十雪詩」は新井白石没年の享保十年（一七二五）以前の作品であるとも考えられるものの、既に先学の指摘があるように『南海先生文集』の配列は乱れており、制作契機は一切不明である。[17]

南海の「十雪」のうち、原典と重なるのが、「蘇武氈（原典では「羝」）雪・袁安臥雪・孫康書雪・子猷棹（原典では「渓」）雪・鄭綮驢雪」の五詩題で、それ以外は『皇元風雅』に見出せないものである。詩題に異同のある二つの中、「蘇武卌雪」の「氈」はフェルトの意で、匈奴に捕えられた蘇武が食糧を絶たれたとき、かじった雪とともに飲み込んで飢えを凌いだものが「氈」であった。原典の「羝」は蘇武が放牧していた牡羊の意で、「雪」と組み合わせるには「氈」の方がより相応しいと考えた上での改訂なのであろう。「子猷棹雪」も同様に、戴安道の住む「剡渓」という地名より「子猷尋戴」故事における「舟」の重要性を強調したかったための変更と考えられる。

こうした点にも撰者の工夫が感じられるものの、更に新撰の詩題はどのようにして選ばれたのであろうか。その五詩題について概観してみよう。

「穆王獵雪」は「穆王八駿図」で知られる周の穆王が、雨雪降る鉼山の西隈で狩猟し、鉼山を手中に収め、虖沱河の北を制圧したという『穆天子伝』所載の故事である。

「景公賑雪」は斉の景公が雨雪の三日続いて人々が寒さに凍えているなか、狐白の裘を着て一人暖かくしていたのを、晏子に諫められて、飢えと寒さに凍える民に施しを与えたという『晏子春秋』所載の故事である。

「東郭履雪」は漢の武帝の時代、不遇であった東郭先生甯乗が履（くつ）の上だけを覆って底のないものを履いていたのを人に笑われたのを、誰が歩いているときに、底のない履だと気付く人がいるだろうか、と応じたという『史記』「滑稽列伝」の「東郭先生伝」所載の故事である。

「王恭裘雪」は王恭が雪の微かに降るなか鶴の飾り毛で出来た裘を着て高輿に乗っているのを見た孟昶が、「まことの神仙のようだ」と歎息したという『世説新語』所載の故事である。

「謝女咏雪」は謝安の姪である謝道蘊が、宴席で雪の比喩を尋ねられ、風に吹かれる柳絮に譬え、絶賛されたという『世説新語』所載の故事である。

すべて本邦室町時代の五山学僧にもよく知られた故事ではあるものの、管見では類似の詩題を禅僧の詩文集に見出すことはできない。画題との関連も想定されるものの、これらが順庵の作例と関連するのか、師匠に感化された弟子南海の後年の作であるのか、或いは別の人物が設けた詩題なのかは定かではない。宰相韓王に替えて君主二名が取り上げられている点、女性の故事が見える点等に南海詩の独自性が垣間見えるとともに、制作契機を窺う糸口もあるのだろう。『南海先生文集』の同巻には江戸滞在中に南海が賦し、新井白石（一六五七～一七二五）が賞して唱和したものに、後年更に追和したという「七家雪」という詩題の連作も収められている。新撰「十雪詩」の制作契機と関連するとも考えられるものの、詳細は不明である。

如上、室町時代以降、五山禅林で愛唱された「十雪題詠」は、江戸時代以降、藤原惺窩門下の儒者に尊ばれ、その詩嚢を肥やし続けていた。特に愛好したのが林家の人々で、あたかも室町時代の学僧、桃源瑞仙が門弟の詩作指導の課題に用いていたように、子弟の教育にも活用していたのであった。惟肖の事例に言及して「十雪」を追和した那波活所と同様、まさに五山文学史を熟知した京都出身の儒者と呼ぶに相応しい志向であった。そしてその姿勢は次世代の木下順庵にも継承され、その門弟の祇園南海にも受け継がれたのであった。

おわりに

祇園南海より六歳年長の伊藤東涯（一六七〇～一七三六）は、

江戸生まれの南海とは異なり、生涯京都に暮らした古義堂第二代である。その東涯が享保七年（一七二二）、五十代の折「十雪図」への跋文を認めている。[18] それは冒頭に掲げた宝暦十三年の常御殿障壁画制作の九年後のことであった。

十雪図跋

宕峰通師命画史図十雪故事属予題詠、此図本有元人詩亦可喜也、為各書其左聊供間中之一適耳。莫以筆拙而見擯弃也。壬寅之冬（宕峰通師画史に命じて十雪の故事を図せしめ予に題詠を属む、此の図に本と元人の詩有るは亦た喜ぶべきことなれば、為に各の其の左に書して聊か間中の一適に供するのみなり。筆の拙きを以て擯棄せらるること莫れ。壬寅の冬）

京都北西の愛宕神社白雲寺長老が画師に描かせた「十雪図」への着賛を依頼された東涯は、先に書き記されていた「元人詩」に併記できることを喜びつつ、自作を詠出したのであった。そこには活所の詠作に見られたような五山学僧への言及は見られないのである。

中国明清代詩の影響が文壇を覆い尽くす前夜、元代の総集『皇元風雅』を淵源とする「十雪題詠」は、いつしか本邦五山文学史に列なることを殊更想起させることなく、唐土の文物に憧れる近世の文人・詩人に賞誉されるようになっていたとも考えられる。しかしその前段には、五山僧の詩文には見られなかった、先人への追和詩に留まらない新たな文学的展開を目指そうと腐心する、五山文壇と決別した儒者たちの試行があったことは銘記すべきであろう。そうした経緯を辿って五山学僧が蒔いた種子は、近世詩壇に強固に根をおろしたのであった。

注

（1）国立公文書館内閣文庫蔵林羅山旧蔵本に拠る。

（2）こうした事例については拙稿「豊臣秀次と文禄年間の五山の文事」（『古代中世文学論考』一・新典社・一九九八）で簡単に紹介している。

（3）『鶴林玉露』乙編巻第一「論語」に「趙普再相、人言普山東人、所読者止論語、蓋亦少陵之説也。宋太宗嘗以此語問普、普略不隠、対曰、臣平生所知、誠不出此。昔以其半輔太祖定天下、今欲以其半輔陛下致太子、普之相業、因（ママ、「固」の誤りか）未能無愧於論語、而其言則天下之至言也。」（京都大学人文科学研究所所蔵刊本に拠る）と記されている。

（4）拙稿『本邦禅林の「韓玉堂雪」詩における李煜詞の受容をめぐって―「五山文学と填詞」続貂―（「国語国文」六三―十・一九九四）参照。

（5）「狩野山雪筆「十雪図屏風」の作画契機について」（「国華」一二七二・二〇〇一）。

（6）続国史大系所収本文に拠る。

（7）『禅林の文学　詩会とその周辺』（清文堂出版・二〇〇四）第一部第二節所収「『古宿会詩』（妙心寺雑華院渋谷厚保氏所蔵）について」参照。
（8）前田育徳会尊経閣文庫所蔵『補庵京華前集』所収本文に拠る。この詩は雪嶺永瑾（一四四七～一五三七）の別集『分韻梅渓集』（国立公文書館内閣文庫蔵・江戸時代初期写本・林羅山旧蔵）にも収められているものの、本作が希世との応酬である点や、内閣文庫所蔵林家旧蔵『京花集』等、他の横川の別集諸本にも採録されていることを勘案して、横川の作と断定して問題あるまい。国立国会図書館所蔵『翰林五鳳集』巻第二十二・冬部でも横川を作者として採録している。
（9）国立公文書館内閣文庫蔵『虚堂和尚語録』（寛永九年刊本・七冊本・林羅山旧蔵本）に拠る。
（10）国立国会図書館所蔵『翰林五鳳集』所収本文に拠る。
（11）拙稿「アトリビュートとしての「芭蕉題詩」――懐素図・寒山図から郭子儀図へ――」（「アジア遊学」一二二・二〇〇九）
（12）『羅山先生詩集』（平安考古学会・大正九年）所収本文に拠る。なお、明らかな印刷上の誤りと思われるものについては文中にて注記の上、訂正した。
（13）注（5）と同じ。
（14）『鵞峰先生林学士文集』巻第八十一所収「倭漢十題雑詠序」。「十台」とは、元の呉師道の別集『礼部集』所収の「十台懐古」を指す。その詩題は「姑蘇台・章華台・朝陽台・黄金台・戯馬台・歌風台・望思台・銅雀台・鳳皇台・凌歊台」である。類似の詩題が岑安卿の別集などにも見られる。
（15）国立公文書館内閣文庫蔵寛政元年版本に拠る。
（16）国立国会図書館所蔵寛政七年版本に拠る。
（17）江戸詩人選集第三巻『服部南郭　祇園南海』（岩波書店・一九九一）解題（日野龍夫氏執筆）参照。
（18）国立公文書館内閣文庫蔵宝暦十一年刊『紹述先生文集』所収の本文に拠る。

（なかもと・だい　本学教授）